



全七册曲亭主人編 九二
 南總里見八犬傳第九輯
 中 十二之卷已下貳拾四丁
 外ニ表紙附羊丁
 丁子屋平兵衛板



特別
 14
 600
 10



前百五十五回 前百五十五回 前百五十五回 前百五十五回

不認池小親兵衛河魁を釣る
登時長成主の傍前をさうし俺子具の所ひに妖妖書の親を今や奪つて情の有り
のうを我々の神靈の示現へと灼然と今や何を疑ふや這て所那を思ひ我々の大
あつて見よまゝありあつて長談綾語の元益を似たり快親兵衛と召返さく妖賊と討滅
をいれ身の濱路を慰めろとす少漏やろから余曲と盡さく人いひていひても遠く身を
起し一躬前塵へ出さる御練の光當先光女の先は立後を後々驛路をわぬの鈴音を
鈴見の錯合して音鳴せぬ其頭を等し侍り西側重層後れを思ひて出て来て光當先
五音りも不修主君と傳ふ熱道朝三家老有司們も皆出仕さる長成出生るの
同注野で降ろすけの詠と定まると因軍司の許あり昨日長頼賀の申明亭と自刺され
の首級紛失の事と并に昔時奇怪の事件の顛末は箇條々と自書首級討つての事

と喉者の血をこぼしてさへあつて首級を捕らへては怪しむ女僧を數に及ぼし
父とて追ひ跟合堅市も件の女僧を禁呪せられて倒れて前後でござる且那女僧が腕を抱え
三女の手神女の手告訴極く奇異にけし大家ひとく騒嘆く所以と知りてさうし小早長成主
の心明かす伏魔神の真助も濱路を返されし音の先景今も告訴を
あつておと音と感嘆さすいけ浩処は荒破南弥を逐電のり頼人なり詠ありあ趣
あつて許人の向ふと南弥を昨日の下晡は信々の為体や東の城より生るとさへいひ今朝
まゝかへまを逐電さす思ひに他宿所を穿ぎせし硯台の内は書一通あり事件
信まはさぬてその書とまわらせり是より南弥の義侠の心剛正可く頼人安西出末助と諱
まゝに手紙を刺し欲を計略のまの趣と徒と欺く元頼人長頼賀と真指す罪人戸郎
長頼賀の首級偷見の戸郎と名を伏家の恩根をか金の御恩に思ひ南弥

大いなる心算思食を以て其の氣成瀬田にちわく分説
要を果す未便之六郎を代りて中那里に赴けり
速に女をよめ餘りの箇様をよめを状の趣を詞を追て
瀬田にまわると遠くを退き女介程より義成主の有り
侍らし或は伏姫神の靈を威徳のたまふと稱讃し或は
事の吉凶思ひのかり明日の必敷を望みたりと云へり
の行程は瀬田十一郎照文の老侯の仰て直ちに先雪
ふら成成誘り且敷に二人の御侍を遣はし
下すを候はばぬひり無き瀬田照文の近習を引
照文の身邊に招き近習を先老侯の御安否を
先雪と四郎と二人は借見たり方僅東に瀬田に遣
瀬田に遣はし

百々たるの御侍
照文無き路のや錯ひゆひ辰相を逢ふに
事やん美しと云はれ照文膝を枕し御説
遊歴の暇を賜りて悔く思ふを命とされ
仰て照文然るに思ふに先老侯を
小臣と喚ぶ御侍相成りて命を命せられ
御侍の言はく俗もの言はく照文の遠
かんと仰り物も走りて馬を鞭で鳴らし
ゆ健や言も復れぬと云ふ瀬田と四郎
ゆかやと云ふと云ふ瀬田と四郎
猪のしんぬるを其の意を伺はれ照文
う言上ん今より十格あき三朝の秋外
船颯風は漂ふ
崎の浦に吹り折る候

思ふに家子之阿弥次郎次を增松と稱せり傳子尚總と用之又出来り
 如手今在十三三三件傳子母の叔父ハ上總國志津郡山田村程迄あり折坂の
 引持寺の住持なり出来り則成之介と稱せり傳子の母ハ比叡の寺住持傳子母の折
 復五郎の子也又傳子母の叔父ハ南洲六出来り傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 人の及ぶ所也戰場の陣及び傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 一留り有則成之介ハ傳子母の叔父ハ清澄の叔父也及神守の威力ナク傳子母の叔父
 文の夏之趣又南洲の遺書也又老侯の遺書也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 百のせぬる為ハ照文ハ傳子母の叔父ハ清澄の叔父也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 亦復馬之名也殿堂之選りけ。詰分向頭全在ハ親兵衛那日大母也真之辨ハ別ハ物
 伴也馬之選りけ。單港の船を央ひつ船。詰分向頭全在ハ親兵衛那日大母也真之辨ハ別ハ物

カニ

昇る時修人市河と云ふ船工の父也松と云ふ名蹟と云ふ依介支那の宿河と云ふ名蹟
 對面を依介水邊の海の日也傳子母の叔父ハ清澄の叔父也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 兵衛ハ亦七親の位ナキ也又傳子母の叔父ハ清澄の叔父也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 前立上りて立在して依介水邊の精進堂を達立迎へて思ひのりる現和子と云ふ名蹟也
 袴の結核下リ刀を解き坐すトハ依介ハ水邊と傳子母の叔父ハ清澄の叔父也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 山は生月ゆひ心樹丈身長丈丈人信也又傳子母の叔父ハ清澄の叔父也又傳子母の叔父ハ元平ハ維新の義士也
 船荷の選りけ。詰分向頭全在ハ親兵衛那日大母也真之辨ハ別ハ物

石上秋ひて高きや。とらね水濤の額。膝を共信し。と可憐に慰む。人の誠。竹梅の影。
 心地と園生程。相諱。依介。又過去。只願。の心。出。九郎。目。虐。折。愛。眉。回。首。瘵。
 痕。示。人。神。の。加。護。羊。柳。柳。再。會。の。果。め。と。と。徳。良。心。の。届。く。板。厨。の。臺。の。錦。文。此。錦。文。流。し。先。
 丹。楓。果。子。と。産。め。の。慶。賀。の。不。血。之。快。勸。と。と。ま。ま。と。親。兵。衛。の。連。く。推。せ。り。や。阿。良。の。且。且。固。
 ね。今。と。ま。ま。の。名。官。待。の。後。に。復。原。へ。今。日。ら。地。方。へ。立。上。り。私。の。旅。行。の。及。君。命。の。依。り。の。熱。
 と。と。去。向。と。い。ふ。一。兩。日。止。宿。せ。ば。橋。と。大。母。の。消。息。を。知。れ。た。と。あ。い。我。身。の。同。固。果。の。七。大。
 一。先。も。君。使。御。及。子。自。身。を。聊。武。功。の。と。り。も。又。故。に。首。尾。妙。を。自。餘。の。大。士。の。在。忍。辱。で。
 送。り。都。で。但。七。未。も。約。の。坂。東。八。ヶ。園。で。遊。歴。の。暇。で。賜。の。重。里。の。旅。客。を。一。後。の。或。時。で。涯。も。も。
 量。知。れ。ぬ。旅。の。和。主。夫。婦。の。對。面。と。く。親。の。御。皇。と。拜。ん。と。思。ふ。不。ろ。立。寄。り。先。夏。冬。せ。せ。く。
 月。の。墓。所。へ。案。内。と。頼。む。と。謝。り。水。濤。の。水。と。い。ふ。激。流。家。廟。と。同。く。又。祖。の。木。主。の。燒。香。を。の。
 同。子。依。介。の。衣。履。足。の。片。儀。を。藤。巻。楊。梅。花。折。合。し。て。程。の。り。親。兵。衛。が。備。を。貸。草。履。を。の。懐。

ぬ。と。抗。足。を。先。の。出。り。夕。陰。大。江。親。兵。衛。の。伯。乃。と。ま。ま。と。送。り。二。親。の。墓。所。に。ま。ま。に。け。ん。
 依。介。の。水。と。汲。三。携。り。花。と。と。り。奉。と。く。倚。り。跪。坐。し。房。八。郎。前。に。死。せ。り。世。の。憚。の。ま。ら。れ。重。妻。衣。を。
 建。せ。り。の。後。に。許。我。の。御。所。を。信。乃。と。追。捕。の。沙。汰。も。と。と。能。九。郎。の。仗。家。先。根。の。出。来。と。怖。れ。地。御。
 走。り。後。寄。り。り。房。八。郎。前。の。一。周。を。三。重。壁。を。依。介。の。遺。言。を。義。俠。夫。妻。之。言。と。い。ふ。大。丈。で。
 勤。て。あ。ま。折。と。三。回。を。建。一。卒。都。府。の。着。な。い。も。不。朽。せ。と。る。終。る。と。親。兵。衛。の。つ。と。見。
 竹。院。に。合。せ。り。念。誦。の。時。の。移。り。覺。も。追。責。の。後。胸。に。盈。り。哀。悼。悲。泣。を。堪。え。と。思。ひ。今。
 念。一。果。を。や。ち。身。を。起。せ。六。頭。を。障。り。樹。の。枝。を。さ。六。條。前。に。大。塚。信。乃。の。実。裁。と。と。と。説。き。
 那。八。郎。の。梅。を。あ。け。親。兵。衛。の。樹。の。身。を。置。き。富。山。に。在。り。日。伏。烟。波。の。昔。の。人。知。ま。り。ぬ。ね。
 四。の。ち。の。大。塚。の。新。樹。を。屈。伸。し。蟠。龍。に。似。せ。勢。ひ。あり。折。り。重。妻。五。五。の。結。ひ。を。実。言。す。
 八。郎。の。梅。を。あ。け。親。兵。衛。の。樹。の。身。を。置。き。富。山。に。在。り。日。伏。烟。波。の。昔。の。人。知。ま。り。ぬ。ね。
 杖。四。邊。を。支。の。墨。多。れ。人。稱。て。八。郎。の。梅。を。あ。け。親。兵。衛。の。樹。の。身。を。置。き。富。山。に。在。り。日。伏。烟。波。の。昔。の。人。知。ま。り。ぬ。ね。

竹梅の影

此の人のことゝも理りなれ水邊りくんは情も別之禁めあむ明日と知りてあだの朝未明より行儀まで
 遂に秋を分ちて而も我兵備の芳朝の徳へまぬ折外蔵古那屋の香華院へ立ち上りて本堂へ祈り
 進み退き煙火の光景を眺む外祖丈五兵衛の善宅の人の贈りたり今今人由邊り
 のまの母屋の尾のこが那屋の花野を遊ばし親兵衛の四才の秋まゝ母も祖母も推かられて折々這里に
 ままの思ひもあつた似て思ひ難く懐舊の端緒を憶ふのよもほほほと笑ふは父の代に軍社重子
 思ふやうさうさうと真阿國府正堂首の西屋田河まゝ杖で歩み名勝故跡を歩みけれと山水の島を旅中
 あれれとさうさうと今番の思ひもあつた先は戸へ赴き陽邊妻恋の煙囪金目木の徳北に到りて
 大塚大山三四の兄を今も那里よりあややや便宜とゆふとあつた段と尋思てまぬ折西阿國へかか
 名を吹かすやうさうさうと貸鏡をさうさうと船に乗るは潮時とも順風も水約三四里をさう
 一時許り船果げんハ船を陸路より登りて上野の原まゝまはせ程のほれ松の下の松見
 向に崩れ建て殿さま極の出来は遠くを傳へ根止在る金目木の原の妻の毎毎手紙

六十有餘の老嫗を客符の程の技多し眼鏡を掛きて着てて親兵衛の晩天に何と云ふ
 六七里の路をまぬれ日目の長に限り四月の月見の十日に近し時侯多し月見る高く未牌の
 初刻の夜へ既して湯嶋へは遠く申の女程を親兵衛の道頭やせや姑且親んとて伴茶を
 立ちやうと見え尻を掴れ老嫗の遠く頭を掴め客ありと見てこれ眼鏡外の橋をさうさうと
 茶桶を執りて身を起こし出でて相合せやまませる今日朝も和のよもほほと笑ふは父の代に軍社重子
 としや船をさうさうと遊ばし親兵衛の四才の秋まゝ母も祖母も推かられて折々這里に
 奔走りて語りまよ他のいらいも情も別之禁めあむ明日と知りてあだの朝未明より行儀まで
 無所不為の世に遊ばし親兵衛の道頭やせや姑且親んとて伴茶を
 語りて情も別之禁めあむ明日と知りてあだの朝未明より行儀まで
 今何面白く人鬼の世に遊ばし親兵衛の道頭やせや姑且親んとて伴茶を
 今日前圓る申明やうさうさうと遊ばし親兵衛の道頭やせや姑且親んとて伴茶を



孝嗣と喚ばる竹藪許の後生と縁より風聲あり那人の多々權佐守如まの負を老たり上様無目
御前の御意とゆへ新参る侍人龍山縁連と懸んく大後毛野瀬智と喚ばる智野瀬智
生之場や下那縁連の犬塚親の寔家や内侍の商議即座に教正ひやる春正月某の日の縁連并
阿童の甲乙相撲を北條家和議の使に赴く折鈴茂林の頭少々犬塚を俟着縁連主僕と副
使を野崎猛虎の之懸捕つる餘越杉野三十一歳半空電門銅介既済と喚ばる野瀬智
主僕に情々地々毛野の助剣する大田大川も少々の勇古為日懸れはけりる事をも五十子
城内に少々の管領懸く怒りせむひくみり毛野と追捕の爲隊兵二百餘名をおく其地
うらぬ鈴茂林の浦邊に煉馬の茂菅犬山道守志與との猛者同盟の義兄弟大銅
村の両軍と二隊を理伏するの隊の福年七十八名猛可起りて前後より挟み攻懸り大刀
風當りやむりや管領方ハ乱謀に懸り者懸りて大將の幸も三四個の近者と俱に
敵の陣を脱れ五十子に投て走りてと道節迄も走れ克ちて發の敵に管領様八頭を身

六九丁

毛野の事

られて頭鎧の矢場も落れも幸ひりて東之缺世に這里より從兵四名の内中兩個は道節に
れはけり全程五十子の城内にありて今や上様驚死懸るをひく懸縁連と陰んとや故
毛野の事と聞くと那道節は告り然るをあれ思ひ多に剛敵途に起りて館の危を躬及
も始と推せ毛野の御子此に來る我懸りて幸何んぞ君あれとせり古より赤い懸る後か
知らせりてんよとびり自又と亡めを懸る河懸權佐守如まの神や女身の事の子細を和
るはけり毛野と懸り腹捨断る臨終に指さけ佐太郎を嗣に遺言し君の先途を見せり
まわしるる克己の館の先馬前を戦殺せし所を折り大山の義兄弟大塚信乃の託計を
隊兵懸り二十名と得り城内に懸れ入り大塚を攻められ城果敢多に陥れ城兵も懸れしは徳
下程の管領様ハ又高嶽の頭少々大銅大村両軍士も取も稠く追逼られ近臣ハ皆懸死に懸り大
將の懸り馬と國の懸り馳せり腹断る程の件の河懸孝嗣も又亡殿と懸り
走りまはるる五十子許に幸てり王孫の毛太郎と極ひりて隊兵を分ちる國城ハ

身ハ此ノ残兵ニ從ヘテ小川ニ隔テ敵ニ俟ビ心死ノ覚期ヲ待テ大銅太村西嶺ニ據リて...

却忍岡の城子ハ頭領を返し且五十子の為林及信乃道節が白旗を言送る文...

禪
後醍醐天皇

民向徽賊の者、似も甚廢る人の果やん是と心憎く、河魁親子のり、身富山に在り、時
伏魔神のまま、ひき取計り、又老嫗、説く、河魁那符郎、合を、懐く言月、
一、まも漏れ、他、城内の機密を探り、故、亦奇なり、ま、左、右、中、の、れ、那、寺、願、の
か、え、是、忠、孝、の、士、之、道、節、を、野、竹、に、相、情、を、交、け、し、ま、ち、か、れ、お、れ、今、我、身、單、や、折、す、
由、も、あ、れ、切、て、目、級、之、奉、命、了、便、と、直、に、讀、佛、場、へ、奉、り、申、上、り、武、士、の、好、意、從、女、已、ん、と、尋、思、
ま、り、足、早、り、打、出、前、回、圖、を、ま、り、既、一、刑、罰、の、折、と、知、り、二、年、二、十、許、後、生、の、百、白、く、月、の、連、
伸、て、黒、漆、背、に、不、結、紐、れ、布、皮、の、上、に、下、此、は、是、孝、嗣、を、又、定、撫、使、と、之、を、武、士、の、細、神、子、の、思、
を、下、縁、野、移、り、藤、原、羅、紗、戰、外、奮、り、探、未、
一、又、年、終、二十、有、餘、一、個、の、武、士、の、袴、の、半、分、隱、り、
骨、之、與、て、殺、捕、殺、の、罪、を、後、持、り、罪、人、後、生、院、坐、す、
持、杖、之、衝、鳴、り、了、短、人、と、迫、り、衆、を、追、捕、ひ、或、は、鐘、鏡、又、は、推、立、持、り、懸、垂、り、
禪
後醍醐天皇

禪
後醍醐天皇

後醍醐天皇、五道の具、百、餘、鬼、を、屠、り、事、狹、小、厨、之、豚、見、と、解、り、結、中、人、と、思、ふ、
人、同、木、枯、木、一、燬、二、寸、見、絶、然、
一、又、年、終、二十、有、餘、一、個、の、武、士、の、袴、の、半、分、隱、り、
骨、之、與、て、殺、捕、殺、の、罪、を、後、持、り、罪、人、後、生、院、坐、す、
持、杖、之、衝、鳴、り、了、短、人、と、迫、り、衆、を、追、捕、ひ、或、は、鐘、鏡、又、は、推、立、持、り、懸、垂、り、
禪
後醍醐天皇

何七罪人の

轎子の昇居させし程に伴當の救正と立寄り、
二身邊に立寄る。や根角生老夫人の顔面を見よ。轎子に連れたる快くはなれぬ。轎子の近つたに生老夫人は、大刀自り轎子のたて用ひ、端熱と谷中二より、
谷中二より言回我身の信猫、東國へ發向す。所以に原主助を、扇谷家と我子景春が和議整ひる。
歎ひてまう人及亡女、眼目の上境をく回さ思ひ起せ、草枕旅宿里。未だ程の奇れ夢。
想ふ神の告め、湯嶋の天満宮枕上。河野依太郎孝嗣の寛政の罪。自殺の。
危死事由に最詳に告ぐまひて、他々父守如く、まはしたる忠臣より、聊事の外御。自殺の。
を誤臣の逆謀ありと上君之怒、刺あ子孝嗣も親も劣らぬ忠誠の心、後生をて又好意の上。
掠り、獄獄敷日及び、本月の某の日、住む地方を、忠見死刑に処せんとす。孝嗣は、
孝嗣は、正可の示さるる、おまはしたる忠臣より、聊事の外御。自殺の。
未だ程の奇れ夢。河野依太郎孝嗣の寛政の罪。自殺の。

何七罪人の

五十の城を封じ、官領へは左も右も、
傳報る。谷中二、色色かき、仰てん、
か、神の縁をり、老夫人の助命と、
泡沫夢幻と、神託の、
昔立、黙れ、原泡沫夢幻の、
謀、其、
長臣の、
谷と果さん、大辟不赦の罪人、
な、又、
な、



孝親

孝親

他し一画あまふりて
 花もつれもつれあまふりて
 のりあまふりて
 花もつれもつれあまふりて
 のりあまふりて
 花もつれもつれあまふりて
 のりあまふりて



子孫見公大傳第九卷五十二分卷

十



孝
親兵衛
戦

○曲字編述八代傳第九輯中帳七の諸工筆研刷人目次

柳川堂信

筆工

惣 卷
第百回筆工

横

守

奇刷

卷八三上
卷十

高

揆

○著作壹手集國字神史新舊田目

書 林 文 漢 堂 藏 板

南總里見八代傳第九輯下帳

近世說美少年録第四集

壯蝶老公科再遊外紀第一集

好華先生醒俗異聞第一集

水滸畧傳 第一集

水滸後 畫傳 第一集

第一輯より第九輯中帳まで六十巻既刊の註
第九輯下帳七冊内申の及出核共二十六巻迄の全部と
平集の稿本とを以て曲字公刊し其の旨を以て
八代傳全部の及出核を以て公刊し其の旨を以て
蜘蛛物語今更盛に於て因て其の旨を以て
自序の及出核を以て公刊し其の旨を以て
管の及出核を以て公刊し其の旨を以て
百八人の列傳と神史の及出核を以て公刊し其の旨を以て
足るの及出核を以て公刊し其の旨を以て
水滸後傳四十四の註文筆刷を以て公刊し其の旨を以て
且て此の及出核を以て公刊し其の旨を以て

編 卷數 奇俠客傳第五集

第一集より四集まで二十巻列記の註文筆刷五巻迄の註

今般出版は八代傳第九輯中帳の先板の諸工筆

○家傳神女湯ゆめゆめ 一包竹百回

巻九の及出核を以て公刊し其の旨を以て

○熊胆黒九子 一包竹五十

中帳の下三冊内申の及出核を以て公刊し其の旨を以て

○婦人足切の妙 一包竹三十

七冊一帳を以て公刊し其の旨を以て

○美濃若田衣八丈 綿談 一包竹五巻

入廣質以依之此段生面は以て公刊し其の旨を以て

○美濃仙女香 一包竹五巻

天保七年丙申春正月十日辰發行

書行 大阪

同

江戸

同

小傳馬町三町目

同

河内屋長兵衛

同

河内屋茂兵衛

同

丁子屋平兵衛

同

版

同

天保六乙未年

冬十月十五日稿了

著作堂子集

筆福碩壽

大吉和布